

2024年10月の総評に代えて

○林 桂○

●さいう●(石川県 19歳)

ペンギンの
ひなを
ふたりで見つめれば
むごんに春のひだまり満ちる

【評】水族館か動物園のデートだろう。「むごんに春のひだまり満ちる」に、二人の間のちょっと張り詰めた、でも暖かい空気感が言い止められている。

●空いう子●(佐賀県 40歳)

秋灯にエンジン剥き出しのバイク

【評】バイクの構造はむき出しになっている部分がある。その典型がエンジン部分。見慣れれば当たり前のことだが、作者のように、それを新鮮な眼で見ると不思議な構造にも思えてくる。

●吉沢 美香●(宮城県 25 歳)

檸檬ひんやり
私の影も

【評】檸檬の触感の冷たさ。そこに重ねられた「私の影も」。檸檬のような清潔感が漂う。自照の時間の静けさを感じさせる。

●うたた●(岡山県 19 歳)

感情という障がいを持ちながら
空が綺麗で生き延びている

【評】生きていくうえで、私たちの「感情」は障がいである。なければ、どんなに生きやすいか。「感情」を「障がい」と捉えた感覚に驚かされる。「感情」を平す世界の存在が必要だ。ここでは「空が綺麗」なこと。美しくて感情のないものたちだ。

●白藤 さくら●(神奈川県 26 歳)

浮いた話の一つや二つ
沈めた話の三つや四つ
泡立つ話の五つや六つ
七つのくつ

【評】七七の音を重ねた数え歌が突然「7つのくつ」という6音で断ち切られる。「つ」を重ねて進んできたものが、「くつ」という韻を思いついて、突然終了するのだ。「くつ」の登場の突然さとあわせて、思わず笑いをさそう。

●常田 瑛子●(山口県 37歳)

金木犀が燃え盛り
横顔を知らない人の日記を読んだ

【評】「横顔を知らない人」の気づきが秀抜。日常的に会う人の横顔を私たちは知っている。横顔を知らない人は、現実の場で会わない人。でも、正面の顔を知っている人。ネットに掲載された写真の顔だろう。その人が記す「日記」を読む。日記では知り得ない横顔を感じながら、その日常を読むことに違和感があるのだろう。

●ムクロジ●(群馬県 17歳)

全部嫌で寂しくて秋雨きれい

【評】「嫌」「寂し」「きれい」という感情的な言葉が重ねられていて、しかも方向性が違う。心が大きく早く動く若い日常的な感性を言

い止めている。

●秋山 颯汰朗 ●(群馬県 19 歳)

チェロの弓立てかけたまま滅ぶ星

【評】突然の終末の風景を「チェロの弓立てかけたまま」で描く。突然の終末の風景は、何の準備もない日常の風景のままである。

●塩見 侘 ●(沖縄県 45 歳)

ゆうやけがまだ帰ってくれない

【評】「夕焼け」は夏の季語とされている。夏の日永の夕空は、なかなか終わらない。「帰ってくれない」には、夕焼けに魅せられて眼を離せなくなった自分がいるということでもあろう。

●深谷 健 ●(埼玉県 26 歳)

すぐ行きます。
寂しい縄跳びの音です

【評】状況設定がよく判らない。その判らなさが、この作品の滞在時間を長くする。しばし

留まって思案する。「すぐ行きます。」は、用件は判らないが何事かへの返事。電話だろうか。その電話を受けた場所の暗示が「寂しい縄跳びの音です」か。夕暮れの公園か。こう考えてきても、結局は解決しない。それを楽しめばよいのだろう。

●ほしはかせ●(群馬県 58歳)

うなそこに
もろてがとどく

虫の秋

【評】「うなそこ」は「海底」。両手が海底に届くのは、私たちの日常生活を超えている。そもそもこの両手の持ち主を、無意識のうちに「人間」と考えることが間違いなのかもしれない。少なくとも超人的な存在と考えるべきだろう。一方の「虫の秋」。ここには対照的に人間の日常がありそうだ。

●あゆな●(群馬県 39歳)

飼い主は百一歳で
毎朝のエサの準備のために
生きてる

【評】長寿は生きる目的をシンプル化する。百歳を越えて生きるこの「飼い主」は、飼育する猫か犬かの餌をやることが生きる目的になっている。自分のためではなく、共に生きる命のために生きる。生きる意味を純化して描いているのだろう。

●川上 真央●(東京都 17歳)

木蓮の花咲くように
みどりごの右手が
雲のしっぽにふれる

【評】「木蓮の花咲くように」の比喩がいい。少し高いところに咲き、風に吹かれている。それが、幼い子が雲に触れようとして手を伸ばしている姿に重ねられている。「しっぽにふれる」のように、幼い子どもの感覚にあっては触れているのだ。

●咲谷 みわ●(福井県 38歳)

そら
トビがあんなに高く飛んでいる
影もないくらいだ

【評】空を舞う鳶の影は、どこに落ちているのだろう。地上のどこかに落ちているには違い

ないが、それを思うことも確かめることもなく、私たちはいる。「影もないくらいだ」は、そのことに気づかせてくれる言葉だ。

●空音アオ●(大阪府 15歳)

B2から南瓜を持って3Fへ

【評】地下2階は収蔵庫になっているのだろう。そこから3階に南瓜を運ぶ。3階はレストランが入っているフードコートだろうか。その日常的な移動を、B2、3F、南瓜に絞って描くことで不思議な絵が見えてくる。